

ローマ53からローマ67

精神分析、ある挫折の理由¹⁾

ローマ大学のマジステーロにてフランス大使臨席のもとに行われた

1967年12月15日18時

1953年の、私の周りの人たちがローマ講演と呼んでいる私の講演は、やはり今日私がそれを再び行うこの場所で行われた²⁾。

「精神分析におけるパロールと言語の機能と場」、それが取り扱った項目は、パロールの機能と言語の場であって、それは、分析実践を問いただし、無意識の地位を新たにすることであった。

直接触れることのできないもの - つまり、本質的に二人の人間の間でこの実践が使用する唯一の道具がパロールであるとき、パロールが始めること - についての少なくともひとつの問いかけを、いったい、どのように避けることができようか。パロールの彼岸へと移行するものを、それ自体として想定されたこの彼岸をパロールが構成するための枠組みを知らずに、どのように位置づけしうなどと期待できようか。

そして、無意識について、そこでは自明であるのでまさに忘れられているあの次元を、どうして今そこに指摘せずにいられようか。それは無意識の構造という次元で、ディスクールと同^{isomorphe}型の無意識の構造の出現以来、その自明性は非常にはっきりとしている。この同型性は、それを明らかにした発見をその形態が予見していただけないに似そ顕著なものであって、この発見とは、この形態の原型である隠喩、換喩という諸形態が置かれたのは、二番目だが、言語のなかだということである。そしてこれらの形態は仮面を被って、つまり、言語がそれら

- 1 -

の基盤を構成しているということが認められずに、圧縮と移動というフロイトによって叙述された一次的メカニズムのなかで現れていた。

ほんのちょっとした熱狂が・・・私が『エクリ』のなかでこの論文の収録を導入する言葉の中で書いたように・・・このような熱狂によって被害が十年に及ぶほどひどく台なしになったこれらの論文を受け入れる。いかなる心理学化の妨害のもとにこれらの論文が受け入れられたかがすでに読み取れる、ほんのちょっとした熱狂である。

心理学的仮説はごく単純である。ひとつの換喩なのだ。30艘のぼろ舟という代わりに、30の帆と言ったり、二つの背中を持った一匹の動物になるうとしている、二匹の人間の動物と言う代わりに、二つの魂と言ったりすることである。

この換喩は、二匹の動物が、それぞれ自分のやり方で、彼らの交接の比較不能なものの規則を描写する場所によってしか、そしてこの場所を覆うことによってしか、魂は存続しないということを否認する方法であるならば、手段としては成功している。すなわち、この否認は永続的なものだということだが、少なくとも精神分析はそこに断絶をもたらす。「少なくとも」と言うことは、精神分析がこの否認を疑問視するということによってのみ正しい。それゆえ、理論にとって、自らの前提を捉えるのはこの換喩を再検討することによってである。

ここにおける偽り^{fallace}(これには隠された偽り/ファルス [phallace³⁾] が含まれている)、魂の換喩の偽り、それは換喩が部分化する対象が、それによって自律していると見なされることである。私が二匹の動物について語る事ができたとすれば、それは彼らが結合しようと望むからだということではないのは明らかであり、また30艘の船団は上陸を意味するのだ。魂とは常にモノドであり、-そして30の帆は、風のしるしである。この換喩の使用のもっとも有効なものは、「モノドロジー」とその潜在的な喜劇的なものであり、またそれは「無敵艦隊⁴⁾」を追い払う風の一吹きである。

- 2 -

ライプニッツの著作がまず最初にこのことを説明するのは、<全体>から出発してはならない、部分が<全体>を捉え、そして含むのである、ということ論争的に再確立することによってのみである。そこではそれぞれのモナドが<全体>であることは、<全体>に依存することからモナドを解放するのであって、このことは全体的人格などというわれわれの最近の愚かな考えを、愛好家たちの抱擁から取り除いてくれる。結局、ライプニッツはモナドにおいて器官についての正しい考察、器官とは機能の困惑を引き起こすものという考察を指し示しているのだろう。

帆に吹く風については、人間の欲望は中心から外れている、欲望は<他者>の場所において形成されるということ思い起こさせてくれる。つまり欲望は、牡蠣が入っている殻から美しい女性の耳が、お世辞とともに思い起こされるレストランの個室において生まれるのである⁵。

欲望を成立させるものとしての非常に明確な構造化にかんして、私はそれを、1958年2～3月に、女性のエディプスについてフロイトが非常に正確に描く力動から出発し、要請がそこで見せる自明性から、そこに欲望と要請の区別を示して導入した。

そのあとで間違いを正すのは容易となったが、この間違いから、今日精神分析家を明確に示すことについての伝統的な保留が説明される。つまり、フロイトには痕跡さえもない欲求不満へのあの訴えである。精神分析家が要請に応えることができないのは、単に、それに応えることは必然的にそれを失望させることであるからで、それは、要請されているものはいずれにせよ<他のもの> [Autre-Chose] であるからだし、知らなければならないのはまさにこのことであるからなのだ。

彼岸には愛の要請があり、此岸には、欲望が引っかかる欠如の絶対的なものがあるのだ。

出発点におけるほんのちょっとの熱狂がすでに誤解のしるしだとすると、それはまず私のディスクールが、ある典型的な耳の遠い人間によって、自分のおもちゃの売り上げを単に再び伸ばすためのけばけばしい宣伝とし

- 3 -

てしか受けとられなかったからである。(すばらしいおもちゃだ、と彼はその時言うのだ)。

なぜなら、フロイトの思想の進歩においてそれなりの理由があるひとつの局所論を探るためにフロイトが選択をした、たとえば、理想自我や自我理想などの言葉を、これらの言葉が文学部の「現代心理学」のなかで取り得る意味において捉えるひとつの方法にたいして、おもちゃというのはふさわしい表現だからだ。現代心理学とは、心理学であることによってヒューマニズムにとどまりながらも、現代のものということで必然的に科学的となるものであって、そこには、期待された人間科学の夜明けが、鯉 - ウサギ、魚 - 哺乳類、つまり人魚の夜明けが認められるのだ⁶。現代心理学がここでは音頭をとり、フロイトの局所論のこれらの言葉に、通信簿で評価されるもののような内容を入れるのである。

私は、エスとは結局悪い自我であると言明しているのでしかないあのやり方にたいして、きわめて礼儀正しく叱責⁷するという名誉を与えた(このような会話を大いに楽しむある愛好家はこう表現するのだ)。私はそれを辛抱強く聞かなければならなかった。ああ、このような失策がいかにも不可解であるか理解できるような人がこの聴衆の中に何人いるだろうか。

とはいえ、私はこの驚くべき経験から、アカデミックな愚かさという名目で知的な裏幕の価値として通用しているものを、博学な無知と正当に対比させて置き直すべき言葉である教訓的な無知として捕らえたが、そうするのはこれがはじめてではない。

その市場では権威の密売は慣例になっていて、私は、十年後にその世話で売り渡された。そしてそれもアンナフロイト団のものである闇の条件でなされたので、IPA との gentleman's agreement [紳士協定] にたいして、袖の下として渡されたのは単に私の首であった。IPA については、ここで私の教育の進展における政治的影響を指摘する必要があるが大いにある。

事態の滑稽さからここで言うが、売り渡し人がこの引き渡しにたいする個人的な名目での謝礼をキャッシュ

- 4 -

で受けとるやいなや、彼は<大会>の演壇に上って、これらの事柄の体面をなしている<大会>-歴史の参考のために言えば、エディンバラの<大会>-で、欲望と要請という言葉を響き渡らせた。これらの言葉はフランスの聴衆にとってはキーワードとなっているものだが、彼がそれらによって国際的な手柄を立てようとするには、知性が足りなかったのだ。(これは先に出た愛好家にとってまた笑いの種になるだろう)。

取り違えをしないでほしい。私がここでしているのは、私の聴衆の拡大において、私があるパートナーに負っているものを返すこと以外の何でもない。なぜなら、私の聴衆の拡大はそれに起源を発しているからだ。この成功のおかげでこの集会の注目を引いているのだから、私がみなさんの前に挫折という名目で姿を表すのは逆説的である。

というのは、いずれにせよ私が望んだのは、本屋の成功でもないし、構造主義の周りでなされた大げさな宣伝にこの成功を結びつけることでも、また、私にとって出版/ゴミ箱化 *poubellication* でしかないものでもないからだ・・・。

というのは、噂というものは精神分析家にふさわしくないものであるし、さらになお、分析家が担っている、そして分析家を担うべきではない名前にとってふさわしくないものだからである。

私の名前に帰するもの、それは私の教育のあの古くなった諸部分で、それらについては予備教育に取っておかれて残ることを望む。なぜなら、とにかくそれらは前提的役割から私の手に入ったものでしかないからである。つまり、無知を教育することで、この無知については、精神分析のための採用がずっとそこから生じていたことは不都合なことではないが、精神分析は自らの最初の居場所、名を挙げると、医学と心理学における居場所をこの採用のために残しておくことから、悲劇的な意味を取ったのである。

ここにこそ、『エクリ』の論文集のなかで、ある批評にとってもっとも顕著なものがある。この批評についてあからさまに言うそれはもはや仕事としてあるのではなく、不快なおしゃべりなのだ。それゆえ私は愚痴を

- 5 -

こぼす必要はなく、この批評はやりようによっては弱めたかもしれない関心を鈍らせることはなかった。

たしかに、誰かがそこではヘーゲルの弁証法、そして間主体的伝達が問題となっているのだということに気がつくことがある。だがそれはたいしたことではない。両者は仲良くやっていかなければならず、そしてそこから直ちに、それらは私が精神分析を導こうとする参照点だということを結論しなければならない。

事情によく通じている連中のあいだでここではきわめて不誠実なかたちでくどくど言われることに愚かな響きを与えて、そこに導くのである。

転移に意味を含ませるための「主体的不均衡」という用語が私の一年間のセミナー(60-61)の題として掲げられていたとしても、そこに導くことについて何も変える必要もない。また、私が昨日ナポリで「想定的知の主体の取り違い」についての講演をしたことについても同様である。この講演は、落ち着きを取り戻して自信たっぷりな「想定的絶対知の主体」をどうやら残さなかったようである。

その上、60年の論文、「主体の転覆」は念を押してくれる。最初から、鏡像段階は、<支配者>と<奴隷>との本源的な不和としてのいわゆる純粹威信を賭けた闘争をぶち壊しにしてしまうようなつまらないものとして提示されていたわけではない。

では、なぜそれを引き合いに出すのか。まさしく、精神分析家に、精神分析家が容易に乗り越えて散文に戻っていくジュルダン氏⁸的なものを指摘するためである。つまり知らないうちに戻っていくのだ。このジュルダン氏は、自分自身の身につけている尺度であり、まさに単純なジャン=ポール・サルトルのように、自分ではそうとは想像さえせずに、意識の非共存に自分自身を併合する尺度以外のものではないのだから。

そして次に、いかに今日精神分析家が転移について行う文字通り野生の分析を訂正すべきだろうか。それには、私が一年間の間やったことだが、プラトンの『饗宴』から出発して、(一言で言うと)ここでわれわれがああ想定的知の主体の公準と呼ぶものによって判断されないような-だがまた『饗宴』によって支持されるため

- 6 -

もあるが - 転移効果はないということを証明する以外ない。ところで、この公準にかんして、無意識の場合には、自らが消滅させる公準であって（これが私が昨日証明したことだ）、そうすると、精神分析家はむしろ神話的な欲動の座であるのだろうか、それとも欺く神に仕える者であろうか。

おそらく、分析家の想定におけるこのような見解の相違は、想定の主體が自らの行為において自己を取り戻されなければならないときに、この主體にたいして出された問いであるに値するであろう。

ここにこそ私は、紆余曲折の節々に微妙な配慮がなされた論争や、どのように言葉を積み重ねても訪れるもののない記念碑にしかならない私の日々の消耗を通して、ある人たちのサークルを導こうとした。このサークルは、愛のように偶然にできあがったので、愛という選択をするように思えたのだ。

つまり、私は知性の改善⁹⁾に身を捧げるのであって、そこに他者を加わらせることはひとつの行為であるような任務がこの改善を課するのだというわけだ。分析家が任務を遂行する力があればあるほど間違いなく気づくように、ほんの少しでも行為がしりごみすると、分析家の方が本物の被分析者^{psychanalysé}となるのだ。

だがこのことは作業と行為の関係を隠してしまう。

私の教育の悲壮なところは、この教育がこの点において作用するということである。そしてそれが、私の『エクリ』、私の経歴、私の教育のなかで、あらゆる批判もこえて公衆を引き留めるのだ。彼らは、すべての人が関与するような何か在那里働いているのを感じている。

もっとも、それは非公開な近傍から切り離せない行為において明らかになることであるが。

そういうわけで、私のディスクールは、友人であるレヴィ＝ストロースの業績のようなものに比べてまったく貧弱なものだとしても、シニフィアン、シニフィエ、「それは語る」、痕跡、書かれたもの、畏、神話、さらには欠如、これらのものが押し寄せる中で、違った指標を立てるのだ。今や私は、それらのものの流通について触れることを放棄している。この泡沫のアフロディーテが、最後に、そこから差延 [différance] が、a を伴って¹⁰⁾、

- 7 -

生まれた。このことは、教理問答を引き継ぐものとしてフロイトが分類するものにとって希望を残すのである。

それでも、すべてが下水に流れたわけではない。対象 a はそこに泳いでいないし、大文字の〈他者〉にしてもしかりである。そして i(a)、鏡像的小文字の他者のイメージさえ、誰も驚かさない自我の終末をとっても、愛においてもたらされたナルシズム的疑惑をとっても、まだありふれたものとはなっていない。カント化 [kantifiée] (^{quantis}量ではなく、カントをさす) された倒錯については、始まったばかりである。

本題に戻って言えば、作業とは、精神分析である。行為とは、それによって精神分析家が危険に身をさらして作業を保証することである。

周知のことだが、精神分析の作業は精神分析家を行為のために準備させるということが認められており、そのためにひとつの精神分析は教育分析だと呼ばれる。

作業から行為への移行は、作業の終結が行為へと押し出す欲望の成立に懸かっているのでなければ、どのようになされるのであろうか。

これについては何もまともなことが言われていない。ところで、私が（30年の経験から）保証するのは、行為へのこの到達については、この到達が判断される秘密の状況においてさえ、つまり資格を持った精神分析家の手によってそうされてさえ、謎は深まるばかりだということである。そしてそこに一貫性を置こうとするすべての試練、とりわけ、私が行為そのものを問いたただための問いと同じ問いをそこにもたらすことが私に課するすべての試練は、私についてこようと決意していると信じていた何人かの人たちにまで、かなり奇妙な抵抗を生みだしている。

この保留された領域の入り口において重要なのは、何が明白であるかに注意することで、それは、私の弟子たちの養成は疑問視されていないということである。この養成はおのずと認めれるものであるだけでなく、いかなる点においても私を援助しないという厳しい条件 - そこでははっきりと誓わなければならない - のもとでし

- 8 -

かそれが認められない場所でさえ、非常に評価されてもいる。

他のいかなる検討もそこではなされていない。いずれにせよ、現在の条件では、この検討は評判をもとになされる以外のいかなる基準ももっていない。教育分析を向上させうると思われたものである個人的精神分析の資格は、教育分析はたしかに間違いなく個人的であるが、それを指導する者にとってであるという、言い間違いの形で表明される無能さを告白するものでしかない。

これが躓きの点である。私はそれについて書くのを著者のための別刷りに載せるために削減したのだから、大いに控えめにしたものであるが、それでも、私はそれについて、1956年に精神分析諸<協会>において支配的であった主体性としてとどめておきたかった。今では私の『エクリ』読めばそれについて風刺とは違うものを知ることができる。そこにあるのは即位のあの位階化された構造であり、そのもっとも低い位階は私が<思い上がり>と呼んだものにより、<至福>の天上を頭に被っているヤコブの梯子¹¹に入る。このような姿を繰り返すのはそれを嗤うためではなく、それが着想を得ていると私が示す長老スウィフトの方法で、そこに諸個人の意志を型に入れるひとつの捕獲のアイロニーが読まれるためになされるのだ。これらの儀式的秩序のすべてに、私はそこで空しく触れた。

この秩序は、そこで自分を立派に見せるために始められた精神分析の最初の一步から浮かび上がる。この秩序は精神分析家を頭に頂いていることから、分析家を介して、自らのしるしを消去不能なたちでこの分析にもたらず。それは教育分析のために冒された危険の蕾においてすでに含まれた虫だ。そのためにこそ、賭をしたのである。

おそらくこの理想はこの企ての動機において分析可能になるだろう、とひとは言うが、しかしそれは賭という、存在のあの尖端を忘れることになるのだ。

そこでは、それに懸かっていることの重要性は何の意味をもたず、結局取るに足らないものとなる。精神分

- 9 -

析が自らの真剣さに応じて主体に対して勝負をするものを構成するのは、賭の一步なのだ。なぜなら精神分析はこの賭を自らの狂気に戻してやらなければならないのだから。だが、最後に得られる賭されたものは、いまだはかり知れない行為に対してすべての人間が防壁を設ける、あの避難所を提供する。つまり、権力の避難所である。

精神分析家たちが魔術的思考について語る口調を聞くだけで、彼らが拒絶する魔術そのものの威力を確認する反響をそこに感じる。それは、万人の境遇であるものを自分には関係ないことにする威力である。万人の境遇とは、彼らが自分たちの行為について何も知らないということ、そして、彼らが原因の作用のなかに入れる行為は、自らをその理由として捧げることだということについて、いっそう何も知らないということである。

マゾヒストとしての享楽の開口において確立されるこの行為について、マゾヒストはこの行為の手筈を再現するものだが、精神分析はこの行為の混種性を確信をもって修正する。この確信とは、彼の仲間にはこの開口に陥る者はだれもないということ、彼自身もそれゆえその縁でとどまることができるということである。

そこから、各自にとって分析経験はどこから閉じられるかについてはっきりと確信が持てる限りで、経験に与えられた価値の増大が生まれる。そうすると、もっとも短いことはもっともよいこととなる。希望が持てなれが、また、恐れることもない。

名の通った精神分析家の名がつくだけでテキストに許される途方もない愚劣さは、私がそれを引用することで意味が明らかになる（『エクリ』、605 - 606 p ~、性器期への到達の美德についてのモーリス・ブーヴェエからの抜粋参照）。

この愚劣さに驚く若い精神分析家は、私がそれを抜粋して歪曲したのだと思う。そして、それを取り囲むもの、確認するもの、ひいては強調するものすべてを確証して認めるのだ。自分が最初にそのテキストを読んだときには、まじめな著者の書いた説得力のあるものだとして受けとっていたことを告白するのである。

幼年時代においてさえ、年長者に対してかくも妄想的な敬意を抱く状態に陥ることはない。年長者が何を言

- 10 -

おうが、彼らはそれだけのことを言う間違いのない理由があるのだと見なされて、許されるのだ。問題はこのことである。

モーリス・ブーヴェは、私が彼を知った頃、彼が宣伝材料にするいんちき妙薬よりはまともであった。私自身も自制しており、 - 白状すれば - 私が精神分析〈協会〉についての発表を延期したことに、その証拠を見ることが出来る。

彼の態度が変わり、むしろ茶番と言うにふさわしい危機が発生したときに、私が、周囲の者のために与えた、この同じブーヴェにたいして私が立腹していることの簡単な粗描が、彼が言うには、グループの体制に支配的であるナルシズムにつける傷が彼に不安を与えたのだ。

確かに、問題になるのは各自のナルシズムというより、グループが自らをより広いナルシズムの保護者だと感じるということである。それを判断するには、ミッセル・フォーコのような人が人間を否定するにいたるための迂回路の規模を探らなければならない。

すべての文明は、このナルシズムの効果に対抗する機能を、狂人とか道化という分化した役割に与えてきた。

われわれのサークルでは、思慮分別のある人は誰も自分からアントナン・アルトーの情熱を取りあげようとはしない。

もし私の弟子の一人がこの方向で情熱を燃やすとしても、私はそれをなだめるだろう。忘れもしないが、すでにそれに成功したことがあるのだとさえ言おう。

私はだから、フロイトのように、規則通りやるのだし、精神分析思想の停滞を解消するために私が払った努力の挫折に、私が驚くことはない。

とはいえ、想像的なものと象徴的なもの間に区切りがつけられたときから、われわれの科学とその場が始

- 11 -

まったということ、私はしるしづけたことになるであろう。

この核心の点によってみなさんを疲れさせるようなことはしなかったが、この点から、真理という自らの補足を再び出発させるような理論が始まるであろう。

われわれの文明のますます増大する袋小路（フロイトが文明について予感した居心地の悪さ）の前に精神分析が武器を捨てるときこそ、私の『エクリ』の指摘は再考されるであろうが、誰によってであろうか。

*1 訳注：raison は理由のほかに、理性、比率などの意味があり、この題はそれらの意味も含んでいるのであろう。

*2 何キロかは離れた所だが。

*3 訳注：偽り fallace とファルス phallus を合わせて作ったラカンのネオロジスム。

*4 訳注：コルネイユの『ル・シッド』の中では「無敵艦隊」は30の帆という換喩で表されている。

*5 訳注：モーパッサンの『ベラミ』のなかの一シーン。牡蠣の殻を耳たぶにたとえている。

*6 訳注：ヒューマニズムと科学は互いに相容れないものであって、両者を繋ぎ合わそうとする現代心理学というものの自体、人魚のように二つの異質なものの寄せ集めだと言うこと。

*7 『エクリ』647 - 684 p。

*8 訳注：モリエールの『町人貴族』のなかの一節に掛けている。「ジュールダン氏は知らず知らずに散文をつくっていた」というのはラカンがよく使う表現である。

*9 訳注：スピノザの『知性改善論』を想定している。

- 12 -

*10 訳注：差異 *différence* を差延と書く *différance* デリダへの皮肉。

*11 訳注：「ヤコブが、イザクから祝福を受けてイスラエルの地に旅した時、ある土地で石を枕に寝ていると、天に通じる階段が出来て、天使が上がったり下ったりしているのを夢みた。ヤコブは、ここが天の門の地と知り、神に祈ってここにイスラエルの国をつくった。」(旧約聖書 創世記第 28 章)